史料室だより No.43

東洋英和女学院史料室委員会
発行　1994年11月6日

特集：東洋英和１１０周年記念号

中高部10年間の変遷

中学部　栗原正己

1　この10年間の国際情勢及び国内の動きを見ると、将来の年表には、太字で載るであろう事がかなりあるように思われる。しかし、それらの出来ごとは今もその延長線上にあるので、この期間が各スタートの時期であったという見方ができる。このような期間の影響は、中高部のこの10年の歴史には直接及ぶことはないが、年表の中に記すことの出来ない現象は、有形無形に受けているようである。（表－１）

表－１

	国内・海外	中高部
1985	電々公社民営化ＮＴＴ発足	中学部長　黒川信也 高等部長　斎藤浩二
1986		
1987	国鉄民営化、ＪＲ発足 「連合」誕生	高等部長　宇佐見邦輔 （中学部長　黒川信也）
1988	青函トンネル開通 瀬戸大橋開通	※ディアコニア活動（中１）開始
1989	年号、「昭和」より「平成」に 消費税３％実施	
1990	東西ドイツ統一	
1991	ソ連邦解体 （バブル経済崩壊、景気後退）	
1992	平和維持活動協力法成立	中１夏期オリエンテーション 会場　追分寮から天城山荘へ 時期　６月下旬から５月下旬に 中２夏期学校 期間　４泊５日から３泊４日に
1993	新党結成相つぐ 冷夏長雨、米40年ぶりの凶作	中学部仮設校舎に移転 本・別館・大講堂解体 第１回カナダ学習旅行
1994	夏日各地で新記録 米大豊作	※第３期工事着工 中学部長　清野　禮 高等部長　黒川信也 高等部（高一より）新教育課程開始

表中にあるバブルの崩壊と称する現象の影響であろうか、在校生の住居地変動（表－２）にその情況の一端が伺える。又、受験生の居住地情況（表－３）も、その影響と思われる。

表－２

区分＼年度	中学部 85	中学部 94	中学部 増減	高等部 85	高等部 94	高等部 増減
港区	59	49	△	63	42	
世田谷区	71	46	△	62	60	
大田区	35	51	○	46	55	
目黒区	56	27	△	40	34	△
渋谷区	29	12		39	26	
品川区	16	21		18	23	
杉並区	10	14		19	20	
新宿区	18	10		19	20	
中央区	15	12		4	8	
台東区	14	13		28	13	
文京区	14	14		10	12	
中野区	7	2		8	8	
江東区	12	26	○	8	8	
千代田区	6	3		8	1	△
豊島区	7	8		9	9	
練馬区	11	5		7	8	
足立区	9	8		8	6	
北区	4	5		3	9	○
葛飾区	3	4		3	8	○
板橋区	5	10	○	9	15	○
墨田区	4	7		2	8	○
荒川区	4	5		5	3	
江戸川区	10	9		4	10	
東京23区外	13	17		19	15	
神奈川 横浜市	25	55	○	35	41	
川崎市	24	34	○	20	24	
その他	2	3		3	2	
千葉	40	44		12	34	○
埼玉	12	22		15	13	
茨城	1					

表－３　出願者地域変動（出願数の割合%）

		1989（平成1）	1994年（平成6）
東京23区		60．6	53．7
（近隣区）	港区	3．5	1．4
	目黒区	4．1	2．1
	渋谷区	2．0	1．0
	世田谷区	5．8	6．6
東京市部		1．5	3．5
		4 市	8 市
横浜市		9．9	8．7
		11区 緑、港北他	6区 緑、神奈川他
川崎市		2．6	7．0
		6 区	7 区
埼玉県		7．0	7．3
		13市1郡 越谷、蕨、草加他	11市1郡 越谷、大宮、浦和、和光他
千葉県		17．5	17．1
		11市1郡 松戸、市川、浦安他	13市1郡 市川、浦安、松戸他

表に現れない現象としては、ＯＡ化・ＣＤの普及・ワープロの普遍化等の急浸透がある。これらの影響としては、中学部入学試験の準備における一現象（表－４）は、教員の負担、経費の軽減にかかわっていると思われる。尚、中学部入試の出願状況も付記しておく（表－５）。

表－4　　印刷について
1980年度より4教科に変更

1988年度用まで全科外注
1989年～90年度用2教科外注
2教科学内印刷
1991年度用より4教科共学内印刷

表－5　　中学部入学試験に関して

	学校案内頒布数	出　頭　数
1985	818	309
86	981	262
87	1，487	363
88	700	314
89	1，183	343
90	1，725	275
91	1，830	377
92	1，211	294
93	1，436	265
94	1，343	287

2　中高部として最も大きな現象として、次の二つの事が挙げられる（表－1中の※印）。

一つは、校舎建築である。その発足は、100周年の事業計画にそのスタートがあるが、大講堂の再建も含めての経緯は、本格的実施への踏切りとなったと言えよう（表－6）。この事項については、平成8年（1996年）1月末完成の時期に、総合的にまとめられることになると思うので、完成予定図を掲載するにとどめておくことにする。

もう一つの大きな現象は、ディアコニア教育活動である。ディアコニア学習活動とは、『「ディアコニア」とは、新約聖書の「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして自分の生命を与えるためである。」（マルコ10：45）におけるギリシア語の用語（隣人に仕えること・奉仕、の意）に基づく名称です。本学院には、学院創立の4年後に生徒達によって組織された「王女会」（キリストの娘達の交わり、の意）の奉仕活動の歩みがあります。（中略）王女会は、その後、世界ＹＷＣＡ運動に賛同してこれに参加し、「東洋英和中高ＹＷＣＡ」として活動するようになりました。

（中略）

私共は本学院の初期より続いてきましたこの「奉仕」の大切な伝統を継承し、（中略）上のＹＷＣＡの「実践」的活動に対して、その準備段階としての「学習」に主眼をおきながら、中一生徒全員が教師達と共に行う活動として計画されてい

表－6

1985	校舎検討委員会
86	〃
87	〃
88	校舎校地整備委員会
89	〃
90	校舎建築委員会
91	〃
92	〃
93	〃
94	〃

ます。（下略）」（「ディアコニア学習活動について」より抜粋）

以上のように、教師と中一の生徒が、金曜の放課後に、年７回実施され現在に至っている。主な内容は、点字学習・車椅子体験・身のまわりにある福祉、ボランティア活動への関心、身体の不自由な方の気持ち、不便さを知る、等である。

３　その他、この10年間の記録として

創立記念日の式典後、中・高部各外来講師をお迎えしてお話しを伺う機会を設けている。この10年は表－７の通りである。

表－７　　創立記念日講演会

	中　学　部	高　等　部
1985年度	川　崎　富　作	竹　内　　均
86	岡　本　幸　江	長　岡　輝　子
87	（ナシ）	（ナシ）※－１
88	江　尻　全　機	秀　村　欣　二
89	（映画－東京の近代建築）	（芸大生による音楽会）
90	岸　田　今日子	浅　見　祐　三
91	阿　川　佐和子	牟田口　義　郎
92	（ナシ）	（ナシ）※－２
93	（ナシ）	（ナシ）※－３
94	（ナシ）	ジョセフ・ケント

※－１　教職員研修会（一泊大磯）

※－２　教職員研修会（一泊箱根）

※－３　本・別館解体　（９月～12月）

運動会は、両会場それぞれ長短を持っている。横浜校地は好天であれば申し分ない条件であるが、天候の心配と遠距離による実質時間の少ないことがある。体育館の借用は、天候に左右されないが、都合の良い日程確保は至難であるため、1991年のみであった。

1976（昭和51）年　静岡英和訪問をきっかけに始まり、三英和の生徒会の交流の会（表－８）である。欠点は、会場校までの往復の時間がかかり、実質時間が短いことであるが、互いに平素使っている“英和は……”と言うとどの英和か混乱し笑いとなるなど楽しい雰囲気になることである。

表－８　　三校交歓会

1985	山梨英和	1990	静岡英和
86	東洋英和	91	東洋英和
87	静岡英和	92	山梨英和
88	東洋英和	93	静岡英和
89	山梨英和	94	

以上、資料を中心とした10年間の記録となった。

東洋英和女学院中学部完成予定図

小　学　部　10年　の　歩　み

小学部　伊　藤　博　正

1984年、東洋英和創立100 年の年の小学部は、春の運動会からその記念の行事が始まった。1・2年生が紅白の玉を投げて割った鈴から“祝創立100 周年”“100 周年おめでとう”の垂幕が躍り出て観衆の目をひいたのである。そして秋、数々の記念行事の中で、11月5日全学院教職員、全生徒が小学部校庭に集まって記念礼拝を守った。小学部児童は「東洋英和の歌」を感謝をこめて歌った。

式に先立つ夏期休業中に、小学部の教室と廊下の床貼りかえ、窓枠サッシの取換え、塗装などにより校舎が一新したのも、全児童の喜びであった。また、母の会より創立100 年を祝って講堂にオルガン（ヨハンネス　オランダ製）が設置され、礼拝に用いられることとなった。

創立100 周年記念の学院音楽会に、小学部は、合唱で参加した。1～4年生は、“みんなであそぼ”（二部合唱、斎藤喜博作詞、近藤幹雄作曲）、“いざうてタンブリン”（三部合唱、ブルガリアノエル、木岡英三郎作詩）、5～6年生“冬の夜の雪に咲きそめたる”（二部合唱　ピエトロ・エ・ヨン作曲、木岡英三郎作詩）、“天はみ神の栄光を語り”（三部合唱、ハイドン作曲、津川主一訳詩編曲）などを心をこめて歌った。この日の第三部で、小学部母の会有志で、ハイドンの「天地創造」より“天はみ神の栄光を語り”を、松本寛二部長の指揮で合唱発表したのである。

学芸会は、創立100 周年を記念して12月1・2日に行われた。劇、オペレッタ、合唱など各学年で力をこめて上演発表されたが、中でも6年の先生と児童の合作で仕上げた“神さまに導かれて”は、英和100 年の歩みを感謝をこめて劇化したものであった。小学部母の会は、この記念行事の間に、独自で集めた写真の数々をパネルにして展示を行い、母の会会誌「ぎんなんだより」を100 周年の特集記事で埋め、発行した。

小学部の宗教部では、’69 年から父母間に「めぐみ」誌を発行してきたが、この年、100 号を数えたので、創立100 周年を記念して“出会い”のテーマの下に、全教員がペンをとって特別号を発行した。

この年、イースターは、東京都民教会牧師井上喜雄先生により“ここにはおられない”の題でお奨め頂いた。ペンテコステは、桜新町教会川名勇牧師より“教会の誕生日”、クリスマスは、鳥居坂教会長山信夫牧師よりお奨めを頂いた。2月には、キリスト教講演会として“神様とともにいる人”と題し、キリスト信仰によって様々な分野で生きる人たちのお話をベテル教会牧師近藤勝彦先生にしていただいた。

同月、母の会の援助を得て、文楽を観賞した。「傾成阿波の鳴門」を豊竹嶋太夫、竹本千歳太夫の話と実演に児童は目を見張った。東洋英和 100 年を祝って、感謝の1年を過ごしたのである。

小学部では、大きな行事として学芸会を隔年に開き、ない年は全校音楽の日を11月末にしてきた。学芸会の年は、運動会は春に挙行してきたのである。また、小学部では、毎週の礼拝のほかに、イースター、ペンテコステ、クリスマスは特別礼拝

として守り近隣の教会の先生、牧師をお招きして礼拝を守ってきた。

'85年ペンテコステ	鳥居坂教会	長山信夫
クリスマス	行人坂教会	伊藤義清
'86年ペンテコステ	和泉教会	中山月夫
クリスマス	鳥居坂教会	長山信夫
'87年イースター	国立教会	宍戸好子
ペンテコステ	経堂北教会	四竈　揚
クリスマス	経堂緑岡教会	一色義子
'88年ペンテコステ	鳥居坂教会	長山信夫
クリスマス	玉川教会	島田勝彦
'89年ペンテコステ	調布柴崎伝道所	青木　優
クリスマス	シャローム福音	千葉明徳
'90年イースター	聖ヶ丘教会	山北宣久
ペンテコステ	恵泉バプテスト	蒔田英彦
クリスマス	鳥居坂教会	長山信夫
'91年ペンテコステ	短大教授	S.ジュティーン
クリスマス	渋谷教会	藤村和義
'92年イースター	鳥居坂教会	長山信夫
ペンテコステ	保谷中町教会	吉平敏行
クリスマス	駒場エデン教会	笹森建美
'93年イースター	経堂北教会	四竈　揚
ペンテコステ	宣教師	D.ロジャース
クリスマス	銀座教会	鵜飼　勇

小学部では、礼拝のほかにキリスト教的な映画鑑賞や講演会などもして、キリスト信仰をもって生きることを考え、将来への夢を描いてもらいたいと願って種々な試みをしてきた。

'85年　映画鑑賞「汚れなき悪戯」
'86年　〃　「すばらしい友だちアントニーノ」
'87年　〃　「奇跡の人（ヘレン・ケラー物語）」
'88年　〃　「アラスカへの旅立ち」
'89年　〃　「マザーテレサの世界」
'90年　〃　「想い出のアン」（高学年）
　　〃　「わがままな大男」（低学年）
'91年　講演　今関公雄
　　（光の子どもの家施設長）
'92年　〃　柴田昌一（聖坂養護学校校長）
'93年　音楽会　井上とも子（チェロ）

創立記念式には、英和に深い結びつきのある方々にお願いして、児童たちに神の恵みの数々を語っていただいた。

'85年　教諭　竹井美智子（マタ22:37, 39）
'86年　〃　栃内礼子（マコ4：30）
'87年　元部長　外崎長三郎（コリⅠ1：18）
'88年　教諭　野田文一郎（マコ16：15）
'89年　元部長　秋月　徹（マコ22：37, 39）
'90年　元教頭　稲葉一彦（ロマ12：25）
'91年　幼稚園元園長　荒牧富士子（コリⅡ12:9）
'92年　元教頭　小野寺昭夫（ルカ10：37）
'93年　元ピアノ科主任　加藤信子（マタイ22:35-40）

小学部児童の情操を高めるため鑑賞の日を設けている。子どもたちの個性豊かな成長を願い、毎年、種々なすばらしいものを鑑賞する。費用は小学部母の会に援助して頂いている。

'85年　演劇　「モモと時間どろぼう」劇団仲間
'86年　音楽　「アルルの女他」　日本フィル
'87年　演劇　「ガラスの家族」　劇団新人会
'88年　邦楽　「六段の調べ他」　日本の音楽をきく会
'89年　バレエ「コッペリア」　東京シティーバレエ団

'90年　演劇　「バンビ」　劇団仲間
'91年　狂言　「柿山伏、附子」　和泉流
'92年　演劇　「ふり向くなペドロ」　劇団仲間
'93年　能楽囃子「早笛他」　金春流

小学部では、児童の健康診断を春と秋に行っているが、その折をとらえて健診の医師と教師の懇談会をして健康教育に反映させたいと願っている。小児科医の内藤寿七郎先生、川崎富作先生を囲んで隔年実施し、歯科医深田英朗先生、眼科医岩重博康先生をも囲んで学んできた。また、1年に1回教師のための保健勉強会も実施してきた。

'84年　「子どもの心のとらえ方」
精神科医　矢花芙美子
'85年　「健康教育と歯磨き指導」
日大　深田英朗・堀内由子
'87年　「人間関係の中の甘え」
聖ルカ看護大　南　裕子
'88年　実習「救急処置」
日赤病院外科　高橋有二
'89年　「救急システムについて」　〃
'90年　「皮脂厚を測定して」
大妻女子大　菊田文夫
'91年　「東洋英和の健康教育」
元中高養護教諭　宮部黎子
'92年　「子どもの成長、発達と健康」
国立公衆衛生院　高石昌弘
'93年　「教師と医者」　聖ルカ病院　大平　健

そして、子どものための「心と体の勉強会」を92年9月、1～3年、4～6年に分けて、愛育病院名誉院長、日本小児科医学会会長の内藤寿七郎先生のお話を頂き、子どもたちが自分の心と体を見つめ、健康について自ら考え実行していくことが出来るようにと試みた。

この10年の間に悲しい別れもあった。

小学部教諭　栃内礼子先生が6年に及ぶ闘病の後、'89年8月30日召天された。小学部に33年勤めてくださり、55年の生涯を誠実に生きられた。告別式には、英和に連なる大勢の方が参列された。小学部では、9月20日お別れの礼拝を守り、梅澤雄一部長が式辞を述べ、5年生の代表がお別れの言葉を献げた。“一生懸命生きること”を同僚や児童たちに教えてくださった。

元部長　外崎長三郎先生は、'92年12月8日小学部に近いご自宅で静かに信仰の人としての生涯を終えられた。88歳であった。先生は、明治37年（1904）2月青森県でお生まれになり、'41年2月から'67年3月まで、小学部の主事、部長をなさり、戦中戦後の英和を守られた。'54年現在地を取得、新校舎を建設、そして、追分案を開設され、小学部の基をつくられた。その後、日本キリスト教団教育主事、平和学園園長、東奥義塾塾長をされた。12月11日のご出棺を小学部全児童でお見送りした。'93年1月26日、先生の通われた鳥居坂教会長山信夫牧師にお話をお願いして、全児童と教職員で追悼の礼拝を守った。「おのおの自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい」（ピリピ2：4）

'93年8月18日、元部長松本寛二先生が、神戸のご自宅近くの病院で、静かに天にかえられた。78歳であった。先生は、大正3（1914）年京城でお生まれになり、同志社大学神学部に学ばれた。'40年共同通信社に入社。'44年応召、'46年12月沖縄から復員、同社に復帰して'71年まで勤められた。その4月神戸女学院中高部長、'80年10

月から小学部部長として'86 年まで、英和の為にお働きくださった。先生は、音楽を好まれ自らよい声で歌われ、教職員、母の会のコーラスをご指導くださった。よいお話を上手になさり、滋味豊かな文を書かれ、みんなと親しい交わりをしてくださった。“いざ立ちて　み足のあとを、すすみゆかん”讃美歌Ⅱ140 は、先生に教えていただいた歌である。

'93 年12月22日、元部長江良顕三郎先生が新年1月6日85歳の誕生日を前に静かに天に帰られた。先生は明治42（1909）年青森県木造町にお生まれになった。青森師範をご卒業後、木造町の小学校に勤め、後に県から東京の青南小学校などへ出向を命じられ上京された。'49 年招かれて小学部に勤務、学級担任をされた。'58 年から教頭、'67 年から小学部部長を勤められ'75 年まで、26年間小学部に勤めてくださった。ご退職後も評議員として91年まで、英和にお力ぞえくださった。温厚なお人柄、深い信仰であたたかい交わり、ご指導をいただいた。2月4日追悼記念会を守った。長山信夫牧師のお奨め、感謝の祈りをもって先生を偲んだ。

「わたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。」（コリントⅡ4：7）

'91 年2月1日夜、1年生の丸田えり子さんが2日病んだだけでなくなった。7歳5か月という短い生涯であった。4月入学以来、横浜の本牧から毎日元気に通学していた。大変素直で明るく、クラスの友だちと仲よく、親切でみんなに好かれていた。家に帰って友だちの悪口を言ったことがなく、夜ねる時、まわりの人に、「ちょっと静かにして」とたのんで、神様に祈っていたそうだ。小学部が大好きで、遠い通学をいやがらず毎日通学していた。秋のいもほり遠足をとても喜び、重いおいもをしっかり持って帰った。学芸会では、大きなはっきりした声で、かぶと虫を立派にやった。元部長梅澤雄一先生は「心の清いえり子さん、争いを望まない平和の人えり子さん、えり子さんは神様の子となった。自分の与えられた人生を精一杯生き続け、立派に地上の生活を全うされた」と、2月14日のお別れ礼拝に述べられた。

えり子さんを記念して、光風会の岡部昭氏制作のレリーフ“ぶなの森”が食堂への階段壁面に飾られた。このレリーフを見る毎に、えり子さんの遊ぶ森と小鳥たちの姿から、平和な世界を思うのである。

この10年間の人事の異動は次の通りである。

'86 年3月　松本寛二先生ご退任（5年6か月）先生は'93 年8月18日召天された。

同年4月より、梅澤雄一先生が部長として小学部を導いてくださり、'92 年3月ご退任（6年）。同年4月より、白井節夫先生が部長に就任された。

また、'85 年3月、小野寺昭夫先生ご退任、（教頭15年、勤続20年3か月）。

同年4月より、倉本和先生が教頭になられた。'91 年3月まで、教頭6か年、英和に'36 年勤続された。

'85 年　小野寺昭夫(20, 3) 高橋順子(5)　木戸真千子(3)　後藤翆(4)　西尾つや子(11, 6) 永倉嘉子(2, 10) 川又和子(3, 1)　松波栄子(2, 11)

'86 年　松本寛二(5, 6)　竹井美智子(27, 11)
竹尾章子(13, 7) 高橋アサヱ(20, 11)
仲井眞育子(1)　森山佐富美(1)
矢野目里佳(1, 2)

'87 年　大和友子(5) 平松静香(1)

'88 年　加藤由美(9) 小澤聡子(1) 宮田英子(21, 3)

江川千代子(26) A．ギア(1)

'89 年　野田文一郎(27) 畔柳道子(0．1)

栃内礼子(32．4) '89 年8月30日召天

'90 年　石川明子(1) 松岡恵(4)　小野塚昭子(17．2)

永山陽子(1．7)

'91 年　倉本和(36) 酒井美苗(2)　小尾和子(21．7)

伊藤博(9)　深沢かつ子(0．6)

'92 年　梅澤雄一(6)　小池寿恵(8．2) '92 年11月7日逝去

'93 年　保科豊(19)

'94 年　三戸留五郎(14．5) 徳永美奈子(6)

D．ロジャース(20)

創立110 年の年、'94 年度は、4月6日の始業式から始まった。8日、80名の1年生を心をこめて迎えた。

ペンテコステは、鳥居坂教会牧師長山信夫先生に“教会で一番大切なこと”と題してお奨め頂いた（ヨハネ20：19－23)。クリスマスには、江戸川松江教会の久山隼児先生にお願いして礼拝を守る。キリスト教講演会は、来る1月19日深川愛隣教会高橋玲二先生の戦後の体験と教会活動をとおして、今の生き方を省みるときとしたいと計画している。

運動会は、春、6月2日創立110 年を記念して行われ、児童たちは、張りきって参加した。鈴割りの鈴から“創立110 周年　おめでとう”の垂幕が出た時、みな拍手をもって祝った。

12月1・2日には、創立110 年を記念して学芸会が開催される。今、各学年、クラスで練習が重ねられている。

11月7日の記念式には、英和に長く勤められた梅澤雄一先生のお奨めで、礼拝を守る。

10月27・28日は観賞の日、劇団仲間の演ずる「モモと時間どろぼう」を俳優座劇場で鑑賞した。

10月17日「心と体の勉強会」に元日赤医療センター小児科部長の川崎富作先生から、健康の大切さ、心と体の問題などお話して頂いた。

春、食堂に大型エアコンが6基設置され、長年困っていた暑熱と湿気を取り除くことができるようになって、一同よろこんでいる。

また、環境教育の指定校として、都より研究費が助成され、小学部では、新しく環境教育部を設置、学校ぐるみで研究体制に入った。

3月15日第94回卒業式6年生77人が卒業する予定である。この10年の間に、784 人が中学部へ巣立っていった。子等幸あれと祈り、感謝をもって、この10年の歩みを結ぶことにする。

1994年1年生小学部初めての夏期学校でたのしいゆうべのひととき

10年の重み

幼稚園　丹羽輝子

多勢の方々の祝福の中に守られた学院創立 100 周年記念礼拝。その時の校舎も今はもう見る事が出来ない。しかしその中で過ごし、育てられた数々の思いは、映像となって脳裡にしっかりと残っている。何時かはその時が来るとは考えていたが、110 年の節目がその時に当たる事は予想出来なか

った。

創立記念日近くになると子ども達と訪れたマーガレット・クレイグ講堂、講壇の上に横にずらりと並んで聞き手が誰もいない中で、心を込めて歌った“おともだち”の歌は、まるで建物に聞かせてあげているようだった。建物に必み込んでいる伝統の重々しさは、静まり返った講堂に足を一歩踏み入れた子どもたちが、あの光沢のある長椅子に思わず引き込まれるように座って祈り始めたのを目にした時、しみじみと感じたものだった。

スモール・チャペルで創立記念日の礼拝を守ったこともあった。社会の激動の中を耐え抜いて頑張ってきた建物の醸(かも)し出す雰囲気は、子どもの鋭敏な感性で充分に体内に捉えられることと信じての度々の訪問であった。

この10年を振り返って一番大きな出来事は、やはりこの新・旧の入れ替え事業だったが、幼稚園の10年の変化も又これと等しい程のものだった。

25年間幼稚園に奉職された荒牧富士子先生の後任として、小谷洋一先生を園長としてお迎えする事が出来たのは不幸中の幸だった。初めて現場に迎えた男性の園長（院長が兼務の場合、中高部に常時園長は居られた）の存在は、女性ばかりでのんびりと気楽に過ごしていた保育者達には一寸した緊張だった。また、小谷園長にとっても驚く事の多い一年間であられたに違いない。しかし何と云っても唯一の男性の出現は、子ども達にとっては大きな喜びだったし、保護者の方々にとっては心強い助言者として喜ばれた事だった。本部と幼稚園を往復されながら、物静かに誠実に、それでいて楽しい思い出の数々を残して下さった。特に入試後の事務処理の東大数学出身の小谷先生扱うパソコン対、質より頭数で取り組む保育者の人間頭脳の対決は、どうした事か保育者側に凱歌が上がったと云う。

思い出す度に心暖まる事もあったが、私が特に導かれたのは、先生の確固とした信仰であった。毎月出される配布物の巻頭言、教師会の礼拝で淡々と語られたお話し、入園式で奥様の助けを借りて作られた、手をつないだ一連の子ども達の切り絵をマジックのようにさっと広げられ、上手に聖書の愛の精神を小さい子ども達に伝えられた手腕、追分キャンプの礼拝で演奏された美しいリコーダーの音色、かと思うと運動会の親子リレーでの疾風のような激走など、その巾広く厚みのあるお人柄から数多くの感動を与えられた感激の一年であった。

その後、法人本部の激務へと移動され、教員室は再びうららかな花園へ戻るとの思いの中にお迎えしたのが、国立の幼稚園からの藤野敬子先生だったが、思いに反してこれ又「風と共に去りぬ」の異名の持主で、実にテキパキと仕事を処理されていく実力者だった。保育者達には小谷先生とは又違った緊張が与えられ、大きい飛躍の時となった。が、先生には何ともまどろっこしい時であられた事と、今でも申し訳なく思って過ごしている。

しかしこの４年間は、保育の見直しと云う重要な時となった。今迄何気なく続けられていた保育を、違った視点から見る事によって、原点と対比する事が出来、新しい子どもを取りまく環境に合った保育へと少しずつ方向を変えていった。礼拝、遊び、諸行事、と云った保育内容の見直しと共にかねてからの念願だった３才児保育の実現は、幼稚園の生活と、保育者の柔軟性を更に豊かにした。

先生の発想のユニークな事は、野草の生い茂る裏庭の開発と、そこへ出るための、窓を出入口と併用する発想からも充分窺える。1962年に建てられた現園舎は、植物の著しい成長や、備品の老朽

化から、少しずつ採光や雨もり等の問題が生じていたが、着々とその解決に当たられ、その手腕は専門家も驚く程であった。又、それ迄あまり外部へ発表する事の無かった東洋英和幼稚園の保育を、積極的に執筆によって外部へと発表された。その事は、中にこもりがちな保育者達の目を外へ向ける事へと繋った。「本当に子どもの側に立って考えているか」確認しながら行う保育の姿勢を徹底していく努力をする事を、私は先生から学び、前向きに取り組む事に専念している。

又全く機会の無かった国・公立の保育者との交流も先生を通して可能となり、保育の思考にも巾が出てきた事は大きな喜びだった。英語が堪納であられた先生は、英文で園の生活の概略を纏められ、度々訪問される異国の方々から喜ばれている。香港でのアジアキリスト教保育者協議会では、英語で幼稚園の保育とその理念を、アジア諸国の指導者達へ発表された。

常に大きな不安がつきまとう指導者の交代も、このようにその時、その時に適った師が与えられた事は、言葉では云い表せない程の感謝であり、神の守りと導きは、今迄も又これからもこのようにあるのだと云う事を確信した10年であった。

1994年は学院の110 周年の年であると同時に、幼稚園にとっても80周年と云う感慨深い節目に当たっている。この80年を振り返り、カナダ宣教師の方々の学院と日本の人々へ預けられた情熱に「東洋英和幼稚園80年の歩み」を編纂する作業の中でふれる事が出来たのは、大きな感激と感謝であった。

しかし、その教育の基本方針が歪められていないか、理想とする人間像、学院像を正しく理解しようと努力しているか、先生方の生き様から何を学んでいるのか育てられた感謝の思いを充分に持っているのか等々自分へ問いかけられる問題点も多く、この節目を心が引きしまる思いで過ごしている。日本でやるべき事はもう終ったと日本からの引き揚げを決定されたカナダミッションへ、育てられた私達の感謝をどう伝える事が出来るのか、私達に出来る事は何なのか、今考え、実行する時が来ているのではないだろうか。

神は自然な形でバングラデッシュとの関わりを備え与えて下さった。そして又幼稚園の中に、今迄の感謝を自分達の労働で得たお金を献金したい動きへと導いて下さっている。子ども達は今年もぎんなん拾いに精を出し、秋の日射しの中にその姿は美しく輝いている。

今年のクリスマスの礼拝は、教師一同であのセンテナリ教会で守り、ミス・カートメルを体中で感じてこれからの働きの源動力になるようにしたい。そして宣教師の方々の質実剛健なお働きには比べる事は出来ないが、幼稚園一同の気持と共に集められた献金を捧げ、学院の発展の報告と感謝の祈りを捧げたいとその時を待ち焦がれている日々である。

ぎんなん献金は園児ひとりひとりの手で

短期大学の10年

短期大学の移転をめぐって

保育科　岡田洋子

短期大学は、1986年春、横浜校地へ移転した。この10年の最初の2年（1984年－1985年）は六本木時代最後の時期で、筆者は保育科主任として新科の設置、横浜校舎の建築等に関わり、移転後、科長制となり、1986年度、1987年度、科長を務めた。振り返れば、この10年の前半は、短大の移転をめぐる激動と第二世紀の混乱の幕開け、当時の宗教主任十時英二教授が「短大だより」（1984. 11. 1）に示唆された「東洋英和の使徒後時代」の“試練のとき”であった。

歴史は過去から現在へ、そして未来へ続く。短期大学の自主・独立経営のための学生数定員増や新科増設、および短期大学の将来：四年制の問題が、真剣に、具体的に語られ始めたのは、1970年代後半、石井次郎院長・学長のころからである。しかし、六本木校地は短大の設置基準にも達せず、文部省から改善を求められていて、広い校地の確得が最大の懸案事項であった。それゆえ、学院の横浜校地の取得と短大の移転は飛躍への第一歩として受け止められた。そのころの短大の動きは、「短大だより」第34号（1984年）、第35号（1985年）、第40号（1987年）に詳しい。

1984年夏、秋の全院協議会に向けて、短大全体協議会が開かれ、「移転後のきめ細かな教育」および「四年制大学構想」について協議が行われた。田島信之学長のもとで、私たちは、まず、短大の経営のための適性規模の実現、次に、短大の四年制への昇格という2段階の発展を考えていた。当時、保育科と英文科の両科全学生数約400名、短大の経営基盤の確立のために、学生数1000名を目標に、国際教養科の設置と両科の定員増を図ったのである。移転後、1987年度の学生総数は1056名、国際教養専攻科設置も検討された。しかし、1989年、大学開設のため、短大定員は50名削減され、1990年以降、2学年100名余の減少となった。

さて、1984年は英文科創立30周年で、新富英雄英文科主任は「短大だより」に“四年制大学への脱皮”の夢を語り、ある教員は、“緑の横浜校地はそのために与えられた約束の地”と述べている。キリスト教保育者養成を目的とする保育科も、教員養成機関として、短大制度の限界にあり、最低4年の年限が課題であった。また1985年、学長代理を務められた故前田寿教授（国際教養科設置のため就任、1986年科長）は“女子大学つくり”を“第二世紀の大目標の一つ”とした。

横浜校舎の設計細部の検討を終えたのは、1985年の夏、短大の夢の実現を予想して、教室や実習室、研究室は大きさや用途の変更が容易な構造としたのである。このように、移転後しばらくまで、学内では、短大を中心とする学院の一貫教育としての女子高等教育構想が論じられていた。

しかし社会情勢の変化により、短大にはない専門課程で構成される大学の早期実現構想が提案され、短大はそれを理解し、同意した。移転後、学院と短大間のコミュニケーションの不十分が特に新しい教員の間に強い不信感をもたらし、多くの

人が去って、短大の混乱と不安定の一因となった。クリスチャン・スクールでこのような事態が起こるとは、筆者には心痛む出来事が続いた。ある教員は、この間の経緯について、「宗教部だより」№57（1992. 3）に一文を寄せて、去った。

この10年の後半は、短大の枠で各科の教育内容の充実が図られてきたが、“試練のとき”は、なお続いている。学院が飛躍するとき、様々な試練や痛みは乗り越えて行かねばならぬ。本学院はキリストによって建てられた学び舎。建学の精神は「敬神・奉仕」。今、それぞれの「敬神」の思いを深めた「奉仕」の実践が求められている。豊かな緑と美しい花々が咲く横浜校地での、次の10年の歩みは、愛と信頼に基づく歩みでありたい。

横浜キャンパスに移りて

保育科　石　津　珠　子

100 周年の記念事業として、横浜に新たな校地が拓かれて、ここに次々と校舎が建ち並び、樹木が整えられ、十字架高く掲げられた礼拝堂が与えられた風景は、あの杉林を切り、丘陵を平らにして区画を施した起工式にあずかった筆者にとっては、確実に月日の流れと変化を物語ってくれます。

私たち保育科教員は、この新しき地の広大な自然の中に、子どもたち、学生そして教員が共にいることができたら、学生のかたわらに子どもたちの生き生きした生活が示されたらと常々語り合っていたことでした。1990年以来、神奈川県保母養成事業の助成を受けて、小さな試みを始めました。それは土曜日の午後、2～5才の子どもを対象に、その父母も招いて、学生たちの企画したコーナー、プログラムで楽しい遊びの時間を共有するというものです。名付けて「子どもの広場・親の教室」は、卒業生の方々を保育アドバイザーとして、お願いをし、在校学生との交流を深めつつ、年2回程ではありますが、回を重ねて、近隣の方々にも楽しみに来校していただける良い機会を提供する場となって続いています。これを契機に、より継続的な、子どもとの関わりをもとめて、新しい試みが加えられ、「2才児グループ」や3才の未就園児を対象とした「プレイグループ」の活動が始められています。

さて、保育科の学生と子どもとの接点はもう一つ、緑区にある付属かえで幼稚園にあります。当園は、短大の直属の付属園として、また短大の方針を十分反映した実習の場と機会を提供しつつ、教育・研究を実践的に裏づけ、実証する目的で設立されましたが、近くに短大が移転することによって、その実質性をいよいよ深めることができたように思われます。定期的な実習生の受け入れの内実を豊かにするべく、いくつかの方針が実現し、今日では、専攻科生の週一回の実習、前期・後期各々に2週間にわたる保育科2年生の実習、1年生全員が各々一週間を通して実習するという試みなどが続けられています。

子どもとの生活体験の瑞々しさが、あるいはほろ苦さが、現代の若き学生たちの感性に「人間」を意識させることでしょう。私たちも同様ですが、加えて生活感覚を鋭敏に磨くことが要求される昨今、自然と子どもの姿にたえず関われることをこの地にあって感謝いたしたいと思います。そこに集う者、訪れる者に、したたる緑、鮮やかな印象をもたらすと同時に、年若き者、年すすんだ者の交流の場として、このキャンパスが生かされ、続くことを思います。

「地域研究 Field Work」－アメリカ研修について

英文科　朝　日　由紀子

英文科の現行のカリキュラムのなかで、きわめて特色ある学科目として、「地域研究 Field Work」が設けられている。その内容は、具体的には夏期休暇を利用して実施される「アメリカ研修」である。1992年度から単位認定科目として英文科の学生に開かれ、また94年度には、国際教養科の学生にも開かれた。

実際のところ、全国の大学、短大で海外における研修旅行を実施しているところは多い。たしかに、学生への教育的効果が大きいという点で魅力的であり、苦労は伴うが実施する価値は大きいと思われているといえよう。けれども、実施にあたっての方法論ということになると、さまざまに模索している大学が多いことも間違いない。そのためか、本学のプログラムに関心を寄せ、科目担当者のもとにいろいろな大学の関係者からの問い合わせがきている。単位化しない「研修旅行」であれば、専任教員が交互に学生引率の責任を取るという手当てで済むかもしれない。しかし、きちんとカリキュラムの中に組み込んでの位置付けをするとなると、単なる語学研修で終始するのでなければ、「地域研究」に類する専門分野の教員の存在を必要とするであろう。本学英文科で「地域研究 Field Work 」として単位化したことの意義は大きいのである。

1992～94年度の三か年にわたる実施内容をここに記し、今後のさらなる充実へのステップとして確認しておきたいと思う。

(1)1992年度

ワシントンD．C．での３週間の英語研修に加えて、アメリカ建国の歴史をたどるフィールド・トリップが主要なテーマであった。アメリカの歴史の発祥の地フィラデルフィア見学、建国の父のひとり、トマス・ジェファソンと南北戦争ゆかりの地であるヴァージニア州モンティセロ及びリッチモンド見学は、まさに生きた歴史の勉強であったといえよう。それに関連する、ジョージタウン大学の教授たちの講義は、学生に専門的知識への興味をかきたてるものであった。ワシントンでの研修の次に、アトランタとニューヨークでのフィールド・トリップを行った。なかでも、アトランタでは、マーガレット・ミッチェルの家、ＣＮＮセンター、キング牧師記念館など実際に見聞した体験は学生にインパクトを与えた。

(2)1993年度

テーマは「アメリカの大統領」であった。トマス・ジェファソン、セオドア・ルーズベルト、エイブラハム・リンカーンなどの歴代の大統領の事蹟を訪ねるフィールド・トリップに主眼を置いた。

(3)1994年度

テーマを「荒野と文明」とし、従来のワシントン、ニューヨークに加えて、インディアン文化へのアプローチとして、ユタ州の縦断旅行を実施した。西部の大自然に感動した旅であった。

国際教養科の10年

国際教育科　山　岡　清　二

英和短大国際教養科を出た女性たちの結婚式に招かれる機会がこのところめっきり増え、昨年後半など月平均２件を数えた。ほぼ例外なく３～６年の職業経験を経た後の結婚であり、結婚後も仕事を続ける人が３分の１程度。航空会社、銀行、

商社などで国際的な業務に就いていたケースが多いせいか、これら花嫁や花嫁候補から書面や口頭でもらう「お礼の言葉」には、国際教養科で「（日本語と英語で）新聞や雑誌を読む癖をつけていただいた」点を強調しているのが目立つ。

1986年４月の開設以来やがて10年を迎える国際教養科に初めから在籍してきた私は、かつて『楓園』（第９号、91年７月15日発行）に書いたとおり、国際教養科が志向する「リベラル・アーツの本質は『雑学』であり、幅広い枠組みの中で思い切り動き回る、勝手気ままな知的冒険」だと考えてきた。そして「すべての成果を、学生たちと教師が共有した『楽しさと充実感』に集約できる」とも断言した。

もともと国際教養科には新設当初からこれといった小難しい指針もなく、いわば「徒手空拳」の風情があった。これが創設に携わった当事者の怠惰によるものか、あるいは深謀遠慮であったのかを私は知る由もない。しかし結果として、多様な専門領域から多様な人材を募った上、研究・教育活動にむやみな拘束を加えず、各教員の自主性を最大限尊重した（と思える）ところに、この学科がここまで成長した最大の理由がありそうだ。

それにつけても「世間との関わり」を重視する国際教養科とはいえ、世間からリクルートされる所属教員の「流動性」は半端ではない。定員12名の専任教員のうち、発足時以来の「永年勤続」組は過半数割れの５名。だがこれも幸い、新しい血をどんどん注入して、激動する「世間」に対応するチャンスづくりに転化できてきた。

このように「多様性」「柔軟性」といったところに特徴を持つ国際教養科だが、学科の目的を一つに絞るとすれば、「国際化時代に生きる女性のあるべき姿」を追求することだろう。その点、前述の結婚式やＯＧコンパなどでの手ごたえから言っても、私がゼミ、課外活動などで共に学び遊ぶ時間を共有できた卒業生たちが、「国際性」と「教養度」において、類似の他短大出身者に引けを取ることは絶対にないという確信が私にある。

学校、学科の声価は卒業生で決まるといわれる。「短大冬の時代」に差し掛かって、わが国際教養科にも改組を迫る動きが出ている。だが10年足らずの間に、一部の受験生から「英和の国際教養科にぜひ」と最優先志望されるところまできたこの学科の発展に、精魂込めて取り組んできた一人として、私は、改組しても現状を上回るのは至難だとの思いをかみしめずにはいられない。

最後に、国際教養科のためにご援助くださった内外の関係者すべてに、深甚なる謝意を表したい。

かえで幼稚園の歩み

かえで幼稚園　土　橋　克　子

本園の歴史を振り返る時に、創設から10年までの間に短期大学付属幼稚園としての殆んどの基礎が完成していたことがわかる。その過程については「かえで幼稚園10年の歩み」「短期大学40年の歩み」「史料室便り№36」「保育レポート№６」に詳しく述べてきた。それらを本園の伝統として受け継ぎ、その後の10年について園内外の変化、家庭環境の変化に対応しつつ歩んできたことを記

録にとどめておきたいと思う。

1　短期大学との連携

・付属園として

この10年の間、園長を田島信之元学長、秀村欣二前学長が兼任、現在は福田垂穂学長のもとに筆者が専任する。そして主事を芝恭子教授、ジュティーン元教授、現在は石津珠子助教授が兼任される。その他短大の諸先生の専門分野からの多くのことを学ぶ機会が与えられてきた。

・かえで幼稚園運営委員会（1980年制定）その他

幼稚園の運営を公正かつ円滑に行うために設けられ、学長を委員長とし、後援会の諮問機関として年3回委員会、その他先生方との合同教師会を年2回、定期的に実施されてきた。

・実習生の受入れ

保育科1年生については今年度から全員が本園で各1週間の実習を行うことになった。2年生については従来通り、前期（6月）後期（10月）に各2週間、専攻科生は毎水曜日に実施。学生が幼児を知り、現場を知るための重要な一端を実習園として担う。10年前よりその責任、重さを感じる。

2　園内外における変化と保育

・10年前、草ぼうぼうのたまプラーザ駅前は東急デパートが建ちいまだに美しが丘西に、駅裏の港北ニュータウンの開発が続く。この11月から「横浜市緑区」が三つに分割され「青葉区」となる。

家庭環境については、核家族化、少子化に伴い子どもがますます管理される傾向にあり、その一方で母親は色々な社会状況の中で、育児不安を抱え孤立化している。それは三才児を持つ母親たちが我が子の入園をあせることにも顕れ、ここ数年の間に近隣の殆んどの園が三才児保育に踏み切ったことが変化の一つとして挙げられる。このような状況の中で私たちは、母親のアドバイザーとしての力量が問われ、また母親同士の交わりの必要性、専門分野からの助言の重要性を特に感じている。保育では、「敬神奉仕」をモットーとする中で「見えないものに目を注ぐ」生活を大切にしつつより柔軟なカリキュラムを実践している。

その他、成人した卒業生のキャンプの応援があったり、社会人として活躍しはじめた報告を耳にするようになってきた。この10年をともに歩んだ同労の友とともに深い感謝をもって稿も終えたい。

横山校地でプレイデー

大　学　の　歩　み

大学　岡　本　浩　一

大学が開設されたのは1989年4月で、わずかに5年半前にすぎない。このわずか5年半の短い間にも、大学は新設当初の内容だけに安住することなく、多くの改革を行ってきた。ここで、その歩みを簡単に振り返って見る。

東洋英和女学院大学のおもな歩み

1986年	六本木に大学設置準備室開設。具体的な大学設置準備に着手。
1989年	大学開設。人文学部人間科学科・社会科学科。定員 200人。
1990年	臨時定員増により入学定員を 300人に増
1991年	臨時定員増により入学定員を 400人に増
1993年	夜間大学院を六本木に新設

人間科学科のカリキュラム

人間科学科は、宗教学、教育学、社会学、心理学の４つの系で編成されている。学生はどれかのコースのゼミに所属することにはなるが、いずれかの専門に片寄ることなく、広く学ぶカリキュラムになっている。具体的には、１年時には一般教育科目とともに「フレッシュマン・セミナー」という各教員の輪講を聞き、それぞれの学問領域の入門的知識を得る。２年時には基礎演習をとり、本格的なゼミ・スタイルの授業を受ける。３年４年ではどれかのコースのゼミに所属し、卒業する。

開学後、学生のニーズに応えて、心理学、日本語教育、社会福祉、学芸員資格関係のカリキュラムを増強した。

社会科学科のカリキュラム

社会科学科は、経済学、政治学、国際関係学、地域研究学の４つの系で構成されている。人間科学科と同様のシステムで、学生は、どれかひとつの系に重点を置きつつも、片寄ることのない勉学をする仕組みになっている。

開学後、激動し、多様化する国際情勢に対応して地域研究を中心にカリキュラムの強化を図り、あわせて、学生のニーズに応えるため、学芸員資格関係のカリキュラムを増強した。

入学試験

初年度の入学試験は２月11日と３月11日の前後期方式で実施した。試験科目は英語（ヒアリングを含む）と英語読解評論の２科目だった。また、両学科の併願を認める方式を試みた。1990年度はそれに日本語小論文を加えた(試験は２月の１回)。

1991年度には、アラカルト方式と呼ぶ本学独自の科目選択方法を導入した。それは、英語＋国語＋社会（日本史か世界史）の３科目、英語＋国語か社会か小論文の２科目、英語のみの１科目のうちどの組み合わせの受験をしてもよいという方式である。1991年度はこの方法で、前期（２月）と後期（３月）の２回の入試を行った。多様な受験生に門戸を開く方法として、注目された。

1992年度には、このアラカルト方式を２月１日の前期入試に実施し、３月14日の後期入試には英語＋国語の２科目入試を実施した。さらに、この年度にスカラシップ入試が開始している。スカラシップ入試は、授業科免除の学生を採用するための試験である。12月23日に上智大学と本学の２つを会場にして行った。授業料免除とならない受験生でも、それに準ずる成績の学生は、前後期入試免除という形で入学が許される新しい方式の入試であった。

1993年度からは、大学入試センターのセンター試験に参加し、スカラシップ入試・一般入試（アラカルト方式）・センター試験利用選抜という現在の形が定着した。ただし、アラカルト方式ではこの年度から小論文を除いている。1994年度の入試は1993年度の入試方法を踏襲したが、英語試験の時間配分と配点とをやや重くした。

このように入学試験は、大学が、もっとも意を用い、何がベストかを常に探る努力を傾けてきた分野のひとつである。

推薦入学

院内からは、おおむね40人強をめどに推薦入学を受け入れている（実績は42人から58人）。

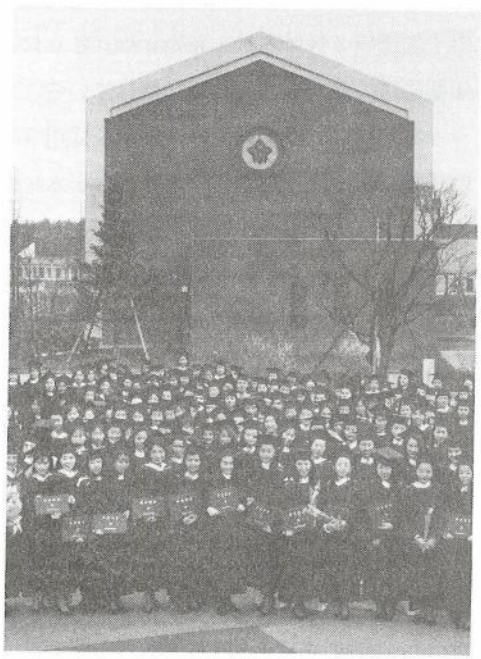
院外の推薦入学は、指定校方式によって実施している。指定校は、実績その他により、見直しの微調整を重ねており、2名推薦校なども設けている。現在の推薦指定校は 227校であり、1993年度には、124人がこの制度で入学している。

その他の入学制度

社会のニーズに応え、社会人入学、帰国子女入学、留学生入学の制度を備えており、1993年には社会人22人、帰国子女11人、留学生1人が入学している。

就職

女子大卒業者の就職は難しい時代になっている



第一期卒業生

といわれるが、幸い、これまでの卒業生の就職は順調である。就職先は文科系で広範にわたり、1期生の就職決定率が97％、2期生の就職決定率が96％となっている。

大学院の設置

生涯教育機関の充実を目指す社会の機運に応え、社会人対象の夜間大学院を六本木に新設した。これは、修士課程のみの大学院で、人間科学研究科と社会科学研究科で構成されている。

人間科学研究科は、臨床心理学、社会学、教育学、宗教学、死生学の5類で構成されており、定員は1学年25人、現在2学年55人（男性9人）が在籍している。職業は広範にわたるが、多いのは医療従事者である。

社会科学研究科は、基礎科目、応用科目、ワークショップ科目、地域研究科目、演習科目などの多種の科目で構成されるカリキュラムで社会科学専攻を深めようという構成になっており、定員は25人、現在2学年30人（男性12人）が在籍している。職業は広範だが、省庁職員、大使館員などが目立つ。

授業は、平日は6時半から8時の1コマ、土曜日は朝から4コマの時間割になっており、多くの大学院生が精力的に学んでいる。

このように、大学は、朝倉孝吉学長のもと、常に社会の動向を敏感に捉えて、東洋英和女学院大学に寄せられる期待に答えるよう努力してきた。その結果、開学わずか6年目にして新聞、雑誌などでも明らかなように、高い社会的評価を得ているのである。

あとがき　一口に10年と云いますが、学院の長い歴史にとって何ページにあたるでしょうか。創立 110周年を記念して、「資料室だより43号」をおとどけします。　（小学部　板橋・木口）